

長崎県対馬市士富採集の打製石斧

川島尚宗

1. 報告資料出土地の推定と周辺の環境

山口大学埋蔵文化財資料館収蔵品の中に大型の打製石斧が収蔵されている。当資料は資料館において保管されていたものの、収蔵の経緯などが明らかでなかったためこれまで報告されることはなかったが、平成26年度の当資料館企画展示において公開された。本報告では、実測図を掲載するとともに、当資料の有する意義について若干の考察を試みる。

当資料に注記はなく、ビニール袋に入れられ、「対馬 士富（居住路）道路傍」と直接記入されているのみである。当館の収蔵品リストによれば、「400813」と記載されているので、1940年8月13日に採取されたようであるが、それを証明するラベルなどはない。

「士富」の所在について長崎県対馬市教育委員会に照会したところ、対馬市厳原町下原に該当する集落名が存在するとご教示を得た。対馬市遺跡地図によると、採集地



第1図 報告資料採集地周辺図（国土地理院発行2万5千分の1地形図
（小茂田）および対馬市遺跡地図より作成）

1：小茂田 2：矢立山1号墳 3：矢立山2号墳 4：御胴塚 5：御首塚 6：下原 7：経塚

点とされる土富集落内には遺跡として指定された地点はないものの、集落北西に下原遺跡が所在する（第1図6）。下原遺跡は対馬下島中央部を西へ流れる佐須川の左岸に位置し、谷底平野に立地する。遺跡の標高は約30mである（古澤2014）。当遺跡は、遺跡地図において縄文～古墳時代の遺物包含地とされており、当資料の出土地である可能性が高い。確実に縄文時代の遺物であるかどうかの判断は難しいが、下原遺跡からは黒曜石剥片が採集されている（古澤2014）。下原遺跡の範囲には上山という地名がみえるので、土富の居住路傍という記述を考慮すると、下原遺跡から土富集落のどこかに持ち込まれた当資料が採集されたものと判断される。採集地点は特定できないものの、当資料は下原遺跡から出土した遺物であると考えて良いだろう。

周辺の縄文時代遺跡としては、佐須川の河口部右岸に所在する小茂田遺跡が知られている。下原遺跡と同様、黒曜石剥片が採集されている（古澤2014）。



第2図 長崎県対馬市土富採集打製石斧

2. 長崎県対馬市土富採集の石斧

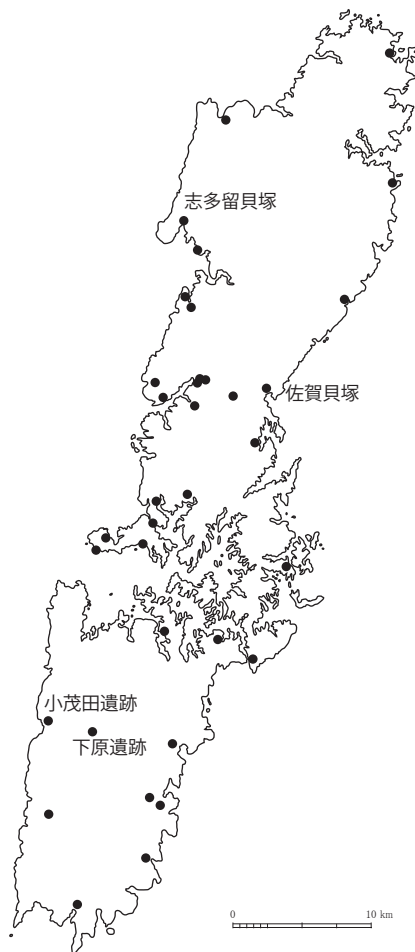
当資料は、全長25.1cm、最大厚3.93cm、最大幅8.95cm、重量1,021.7gをはかる大型の打製石斧である（第2図、写真）。

平面形が基部から刃部まで直線となり、刃部で最大幅となる。裏面側には、刃部の厚みを調整するためか、側面から刃部にかけて大きく剥離調整がおこなわれている。刃部は曲線的に細かく調整がおこなわれる。側面および表裏の基部側に自然面を残すため、摂理面に沿って割れた石材を利用したものと考えられる。基部にも調整痕が残る。刃部には中央部を中心に摩滅がみられ、実際に作業に用いられたと考えられる。石材には頁岩を使用している。

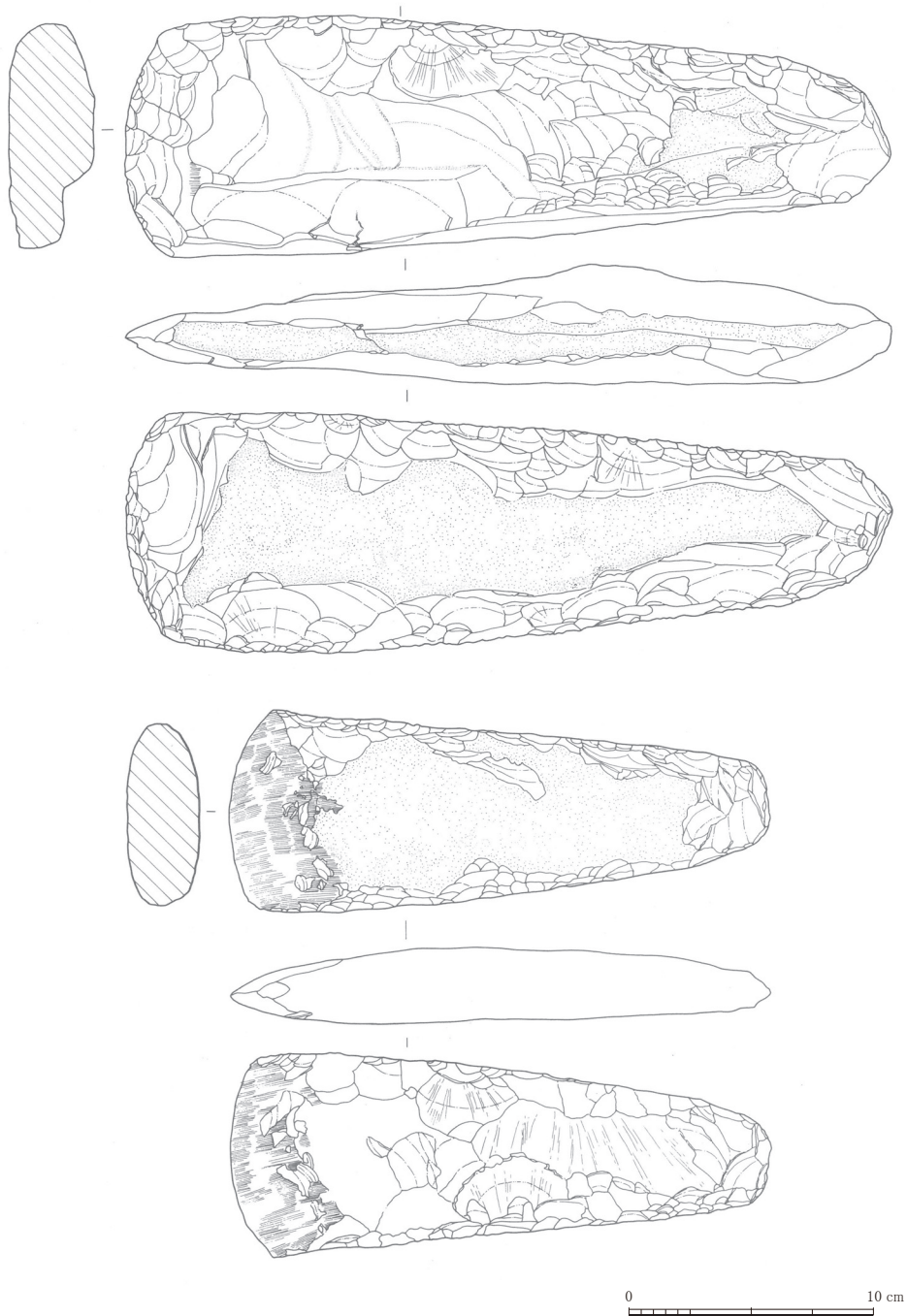
3. 対馬における石斧とその背景

ここでは、対馬における石斧の状況を概観し、当資料とその出土地と推定される下原遺跡の位置付けについて若干の考察を試みる。

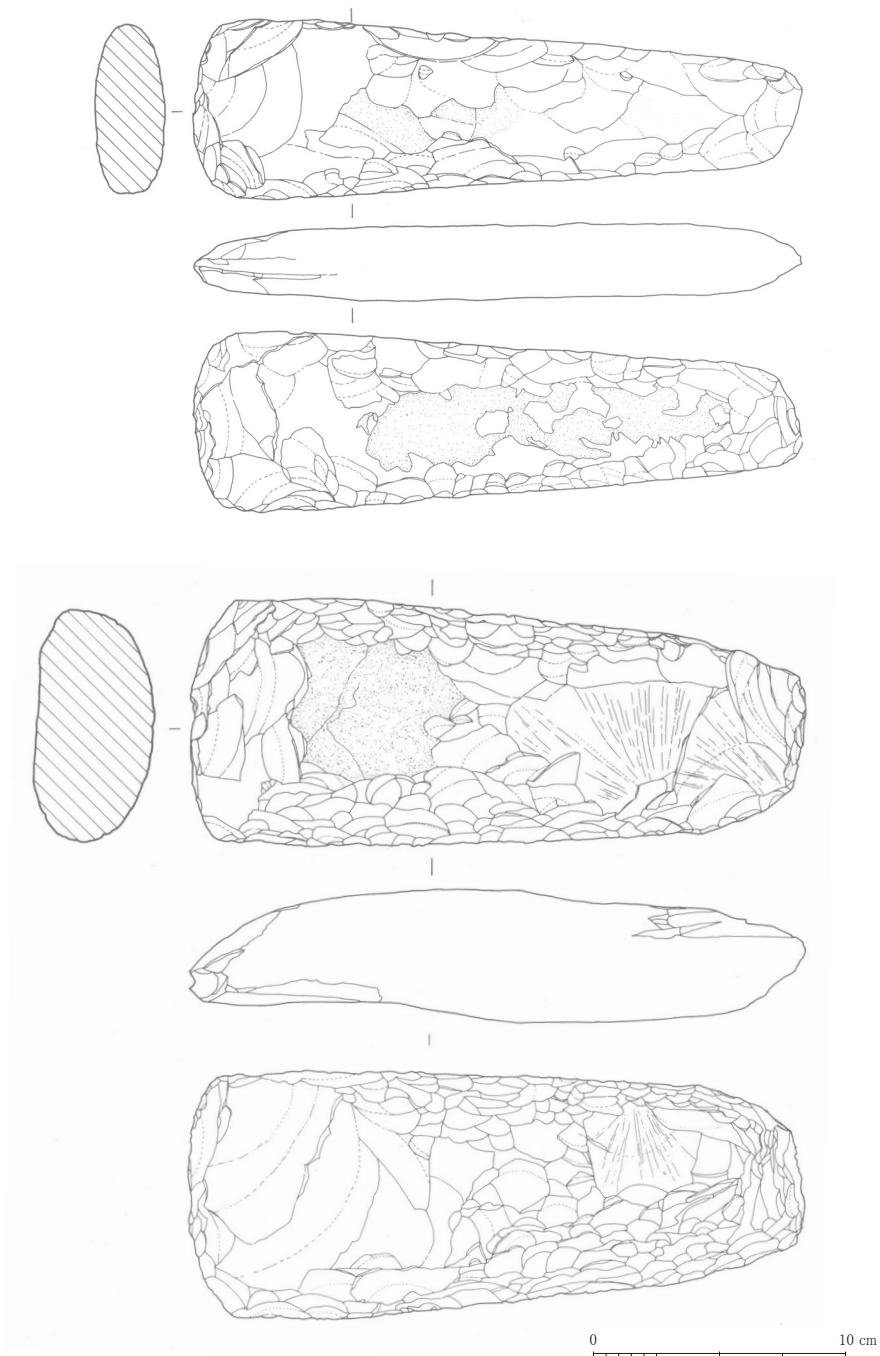
対馬においては海岸部を中心に縄文時代遺跡が点在している（第3図）。これらの縄文時代遺跡のほとんどは西海岸の小さな湾奥の平坦地に立地する小規模な遺跡である（古澤2014:56）。こうした遺跡は短期間営まれたと考えられているが、一方で佐賀貝塚、志多留貝塚のように縄文時代後期を中心に一定期間継続的に営まれた遺跡もある。このうち、佐賀貝塚は対馬市峰町大字佐賀に所在し、対馬上島中央部の東海岸の湾奥に立地している（第3図）。佐賀貝塚からは、住居跡が検出されるとともに、多量の石斧・骨角器が出土した（正林1989）。石斧は未製品を含めて312点出土しており、すべて縄文時代後期に属するとされる。3号住居跡からは石斧と木製品が30点以上出土し、砥石の大半が出土したことから、石斧製作に関わる工房跡と推定されている。



第3図 対馬における
縄文時代遺跡の分布
(古澤2014 図2より作成)



第4図 長崎県対馬市佐賀貝塚出土石斧（1）（正林1989より作成）



第5図 長崎県対馬市佐賀貝塚出土石斧（2）（正林1989より作成）

2号住居跡の平面図にも石斧が数点みられるので、建物と石斧との関連性は高いようである。この事実から、正林（1989:150）は佐賀貝塚の石斧が対馬島内のいくつかの遺跡だけでなく、五島列島など対馬外にも搬出された可能性を指摘している。

佐賀貝塚から出土した石斧は、平面形・断面形・刃部断面形などの属性によってⅠ～Ⅺ類に分類されている（正林1989）。報文では完成形の石斧は刃部が研磨されるとの想定にもとづいてなされたと考えられ、各類には打製・磨製が混在する。ただ、報告資料が製作遺跡と考えられている佐賀貝塚以外から採集されていることから、研磨が施されていない状態でも製品として認識されていたと考えられる。

報告資料はこれらの中で「石斧Ⅲ類」に最も近い形状を呈する（第4・5図）。長さの大小はあるものの、Ⅲ類は刃部が研磨されたものを含め64点で全体の20.4%を占めており、佐賀貝塚出土石斧の中で普遍的な形態であるといえる。Ⅲ類のうち、最長のもは31.7cmであり、最短の石斧は9.1cmをはかり、平均は15.4cmである。全長25.1cmをはかる報告資料は佐賀貝塚出土資料の中でも大型の部類に入り、石斧Ⅲ類で第2の長さとなる。1,021.7gをはかる報告資料は、平均の431.5gを大きく上回り3番目の重さとなる。サイズ・重量からは大型品として良いだろう。Ⅲ類に用いられた石材は、蛇紋岩製の1点を除き砂岩および頁岩である。砂岩製の石斧は37点を数え、頁岩製の26点を上回る。石材の選択と石斧のサイズに有意な関係はみられず、刃部の研磨の有無とも関連は薄いようである。

下原遺跡出土と考えられる報告資料は平面形態、整形、調整の点で、佐賀貝塚における石斧Ⅲ類との共通点が多い。管見では、対馬において石斧が大量に出土する遺跡は佐賀貝塚のみであり、報告資料は佐賀貝塚で製作され搬入されたとみてよいだろう。そうであれば、報告資料の製作時期は縄文時代後期である可能性が高い。

縄文時代後期には西日本でも打製石斧が増加することが知られている（鈴木1991）。西日本における石斧の増加については東日本からの影響も想定されたが（渡辺1975）、西日本で後期前葉以前の扁平打製石斧資料が存在していることから、単純に東日本からの伝播と考えることはできないという指摘がある（幸泉2007;2008）。幸泉（2007;2008）は石斧に地域性を見出し、九州・山陰地方では撥型－東三洞類型、高知平野での括れの深い分銅系石斧が卓越することを示した。本稿ではこうした系譜には触れないが、幸泉が指摘する通り打製石斧が普及し出土数が急増するのは縄文時代後期中葉と考えられ、佐賀貝塚の石斧製作もこうした背景のもとに開始されたと考えられる。

磨製石斧に関しては、九州各地において縄文時代後期以降に出土数が増加する（宮内1987）。さらに、佐賀貝塚で一定数出土しているノミ型石斧（扁平片刃石斧）は九州西・

南沿岸を中心に分布するようになるという。後期中葉には最大幅7～8cmの大型の磨製石斧が粗製に加わり、出土数としては沿岸部で多くなる傾向があるとされる（板倉2006:12）。磨製石斧の動向であり、佐賀貝塚では部分的な研磨のみを施す石斧が多いようではあるが、これを考慮すると、対馬においても九州と連動して石斧が増加していくものと考えてよいであろう。

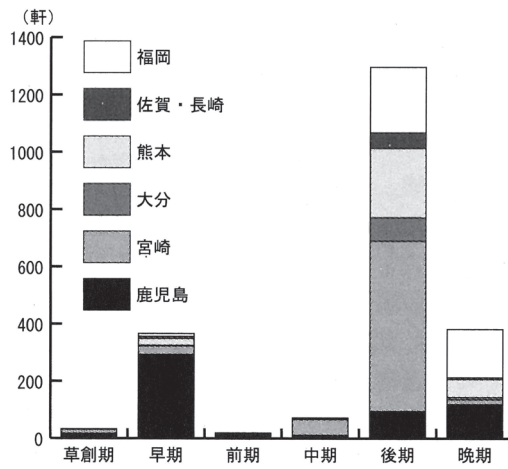
この石斧出土数の増加に関しては、住居跡数の変動と相関する可能性がある。九州では縄文時代後期において住居跡数が急増しており、中期との差は約18倍に達する（林2011）（第6図）。住居構築において建築材の再利用の可能性はあるが、木材の伐採のために石斧の受容は高まったものと考えられる。佐賀貝塚出土資料のうち、大型品を含むⅠ～Ⅲ類には刃部が研磨された資料が少なからず含まれているので（第1表）、これらは木材の伐採に用いられたと考えて良いだろう。刃部が研磨されていない場合でも、必ずしも石鋏と呼べるような薄さの資料は多いわけではなく、むしろ研磨されたものと同等の厚みを有している資料が多い。打製石斧の用途の特定には、肉眼での観察（川口2000）のほか、顕微鏡を用いた使用痕分析（山田・金2011）が必要となるが、これについては今後の課題としたい。

報告資料と類似する石斧Ⅲ類およびⅠ・Ⅱ類は比較的研磨された資料が比較的少ない。研磨済みの製品が搬出されたと考えることもできるが、ほぼ定型的な研磨のない資料が多いので、これらを含めて製品としてとらえたほうが良いだろう。木材加工用と考えられる、より小型で薄手の片刃磨製石斧（Ⅷ～Ⅹ）はほぼすべてが研磨されている（第1表）。図示されたものに限定されるが、片刃磨製石斧の状況と比較するとやはりⅠ～Ⅲ類の打製石斧が全て搬出されなかった未製品であるとは考えにくい。

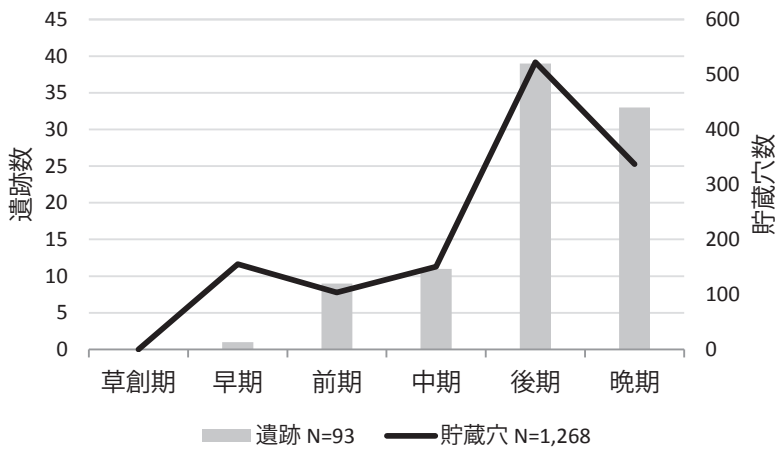
打製石斧が土掘り具であるとすれば（佐原1977:51; 1994:131）、後期における打製石斧の増加は竪穴住居構築のための掘削や低湿地型貯蔵穴の盛行との関連が想起される（第7図）。報告資料にみられるように刃部を薄くするために大きく剥離を加えていることは、掘削作業の効率化と無関係ではないだろう。報告資料のような石斧が土掘り具として機能したとすれば、焼畑などの農耕に使用された可能性も考えなければならない（山崎2003）。下原遺跡は海岸から佐須川上流に5kmほどの平野部に位置している。対馬では海岸部に遺跡の分布が集中することを考慮すれば、やや内陸に下原遺跡が存在した点は注目される。また、報告資料を後期とするならば、この時期に佐賀貝塚のような安定的な遺跡の出現だけでなく、内陸部に遺跡が展開することにも注意を払う必要があるだろう。

第1表 佐賀貝塚における石斧研磨率

細別	研磨	総数	%
I	2	15	13.3
II	11	35	31.4
III	16	64	25.0
IV	8	16	50.0
V	4	15	26.7
VI	2	5	40.0
VII	0	3	0.0
VIII~X	24	24	100.0
XI	11	13	84.6
計	78	190	41.1



第6図 九州における縄文時代竪穴住居跡数の推移 (林2011より)



第7図 西日本縄文時代における低湿地型貯蔵穴数の推移
(小畑2006・柳浦2014より作成)

4. まとめ

以上、山口大学埋蔵文化財資料館に収蔵されている長崎県対馬市士富採集の打製石斧の報告をおこなうとともに、佐賀貝塚を例に報告資料との関連を探った。今後は、使用痕分析によって類似形態の打製石斧の用途を探るとともに、出土遺物の詳細な分析によって、佐賀貝塚のような石斧製作遺跡からの製品の搬出について分析を進めていくことが課題となろう。当資料は採集資料でありながら、考古学的情報の少ない対馬内での石斧の搬出・利用を考える上で貴重なデータを提供していると考えられる。

謝辞

対馬市教育委員会、田中淳也氏には当資料採集地点の照会の際にお世話になりました。また、報告に際して山口大学人文学部村田裕一先生および山口大学埋蔵文化財資料館田畑直彦先生・横山成己先生にご助言・ご協力をいただきました。末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

註)

- 1) 平成26年度第36回企画展『情報求む！～収蔵庫に眠る由来不明の考古資料たち』にて展示（展示期間：平成26年7月22日（火）～10月19日（日））

引用文献

- 板倉有大 2006 「磨製石斧からみた九州縄文時代前期以降の生業・居住形態」『日本考古学』第21号 1-19頁
- 小畑弘己 2006 「九州縄文時代の堅果類とその利用—東北アジアの古民族植物学的視点より—」『第16回九州縄文研究会大分大会発表主旨・集成資料九州縄文時代の低湿地遺跡と植物性自然遺物』31-40頁
- 川口武彦 2000 「打製石斧の実験考古学的研究」『古代文化』第52巻第1号 16-28頁
- 幸泉満夫 2007 「西日本初期扁平打製石鋏集成図譜」『山口県立山口博物館研究報告』第33号 7-56頁
- 2008 「西日本における打製石鋏の出現」『地域・文化の考古学—下條信行先生退任記念論文集—』下條信行先生退任記念事業会 23-46頁
- 佐原 真 1977 「石斧論—横斧から縦斧へ—」『考古学論集』松崎寿和先生退官記念事業会 45-86頁
- 1994 『斧の文化史』東京大学出版社

- 正林 護 1989 『佐賀貝塚』峰町文化財調査報告書 第9集 峰町教育委員会
- 鈴木道之助 1991 『図録・石器入門辞典〈縄文〉』柏書房
- 林 潤也 2011 「九州の縄文集落と地域社会—後期を中心として—」『季刊 考古学』
第114号 79-82頁
- 古澤義久 2014 「玄界灘島嶼域を中心にみた縄文時代日韓土器文化交流の性格—弥
生時代早期との比較—」『東京大学考古学研究室研究紀要』第28号
27-80頁
- 宮内克己 1987 「磨製石斧小考」『東アジアの考古と歴史』中巻 146-164頁
- 柳浦俊一 2014 「西日本の貯蔵穴基礎データ」『山陰地方の縄文社会』175-177頁
- 山崎純男 2003 「西日本の縄文後・晩期の農耕再論」『大阪市学芸委員等共同研究
朝鮮半島と日本の相互交流に関する総合学術調査 平成14年度成果
報告』48-69頁
- 山田昌久・金 姓旭 2011 「初期農耕開始期の打製石斧に関する日韓共同研究」
『2010年度 アジア歴史研究報告書』47-59頁 (on-line: [http://www.jfe-
21st-cf.or.jp/jpn/hokoku_pdf_2010/asia05.pdf](http://www.jfe-21st-cf.or.jp/jpn/hokoku_pdf_2010/asia05.pdf)) (2015年1月9日最終確認)
- 渡辺 誠 (編著) 1975 『京都府舞鶴市 桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館

